



新鑄

椿說弓張月

續編  
卷壹

~13  
3908  
13



如ク何程智慧才覺ニ長ケタル髻的テモ終日ノ御骨折  
ズニヤリ手ヲラント思ノ外御旅宿ニ歸レハ勇氣益々  
寝象年馬ノ嫌ヒ無ク夜々ノ血戰ハ西南ノ戰ヨリ劇  
必ス敵ヲ組敷キ一度ノ後レモ取ラズト（少々ノ棒疵  
コハ樓上ヨリ八艘飛テ試ミ（ハ探索ヲカモ知ラシテ公  
段返ヘリテ働キ（是レモ何ノ危険ノ戰モアリシトノ事  
勇力ノ不足ナルヤヲ國內諸務ノ親方様バカリハ一度  
ス是レ怯弱ナル様ニハ思ヘ居却テ深謀遠慮モ奥床鋪  
別ナリトノ際其他ハ髻的トノ恐ラクハ一人モ淫勇  
ハサス者ハナカルヘシ其甚シキハ御調物ヲ取亂レテ  
カイ御免ヤスノ喝敵ヲ相圖ニ敵兵攻來リ拔伐ニ押倒  
リ雄ノ勇士モアリシト余（話ヲ聞テ殆ント其勇力

問答新聞

ス髻的ハ必ス勇アルノ理ル者耶  
答 怪ムヘカラス疑フヘカラス美髻社會ハ元ト君子  
君子ノ名アル者ハ必ズ仁者ナリ仁者ハ亦必ス臆病ナ  
ヤ仁者ハ必ス勇アリト出陣ノ君子ハ勇力ヲ銃丸鋒刃  
レモ京阪滞在ノ君子ハ之ヲ視ラスコ地ナシ故ニ止ム  
リ熊姉ヲ狩テ餘勇ヲ散シタル者ナラン況ンヤ妓ヲ見  
キノ聖訓アルコ於テヤ嗚呼今ノ君子ハ眩暈コシハ  
哉感々服々

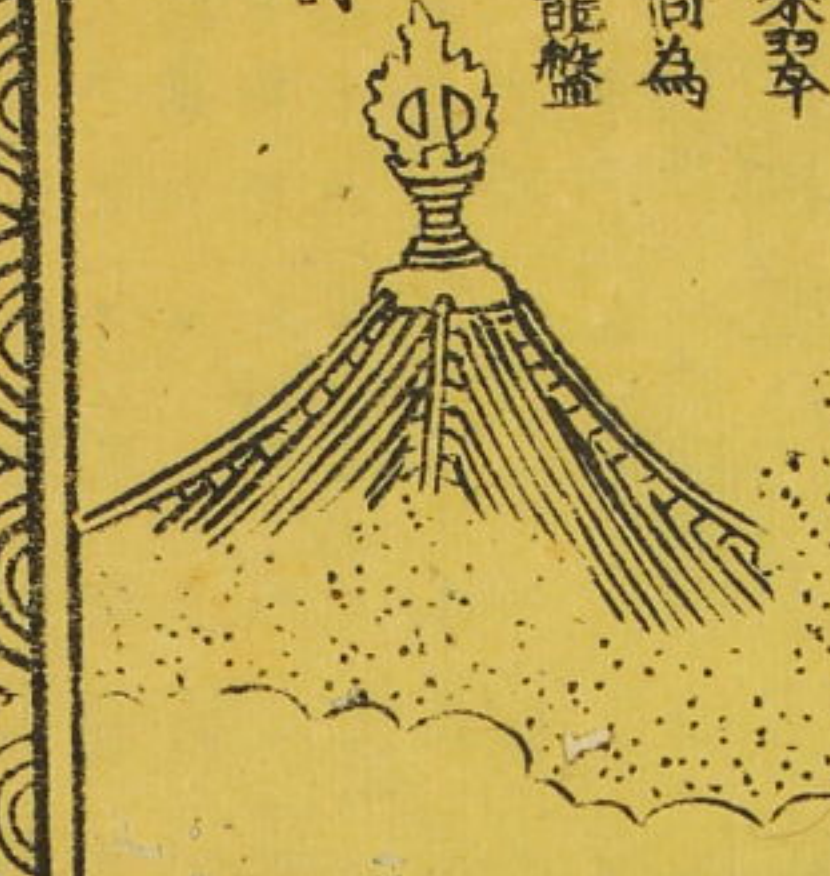
○又々編輯ノ失策

今二十五日警視局第三課ヨリ編輯長代理八塚幹之助  
到來又々失策ガアリタルカト社員一同吃驚仰天中ニ  
二本棒ヲ滴ラシ或ハ眼珠ヲ引付テ冷汗ヲ流セシ臆病



門へ13  
 3908  
 13

天鷄啼處夜生  
 潮東望蓬萊翠  
 霧消紫貝高為  
 雲外關青龍盤  
 作日邊橋  
 明薛惠詩



鎮西八郎  
 為朝外傳  
 一帙六冊

椿説弓張

月續篇

曲亭主人著 群鳳堂梓  
 葛飾北齋画 群玉堂梓

鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月續編

拾遺考證

曲亭馬琴撰

琉球國ハ薩摩の南ヨリ。三十六町と一里と定む。舟行百四十里との  
 地南北ハ長五六十里東西僅二十里不過と云  
 二才四命の説  
 一曰琉球と呼

て。於茲乃志麻もりり平判官康頼入道鬼界嶋に満れて詠る歌ふ  
 薩摩方沖の小嶋ふくれのいと親ふハ昔ハ八重の潮風

源平盛衰記卷の七に載る。記者の云薩摩方とハ總名ハ鬼界  
 島十二の嶋なれや。五嶋七嶋と名付り。五嶋ハ日本より後へ云云予が推

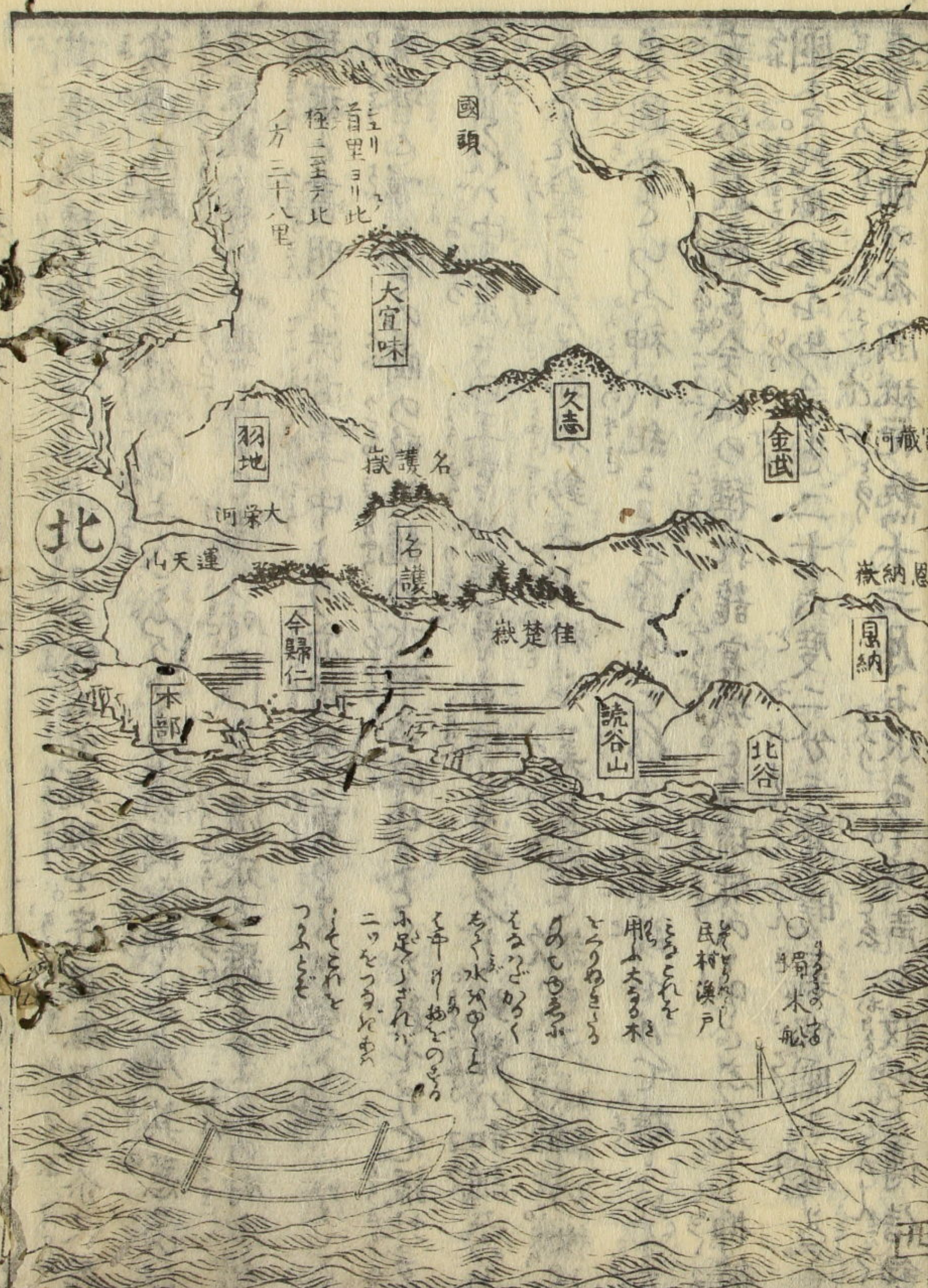
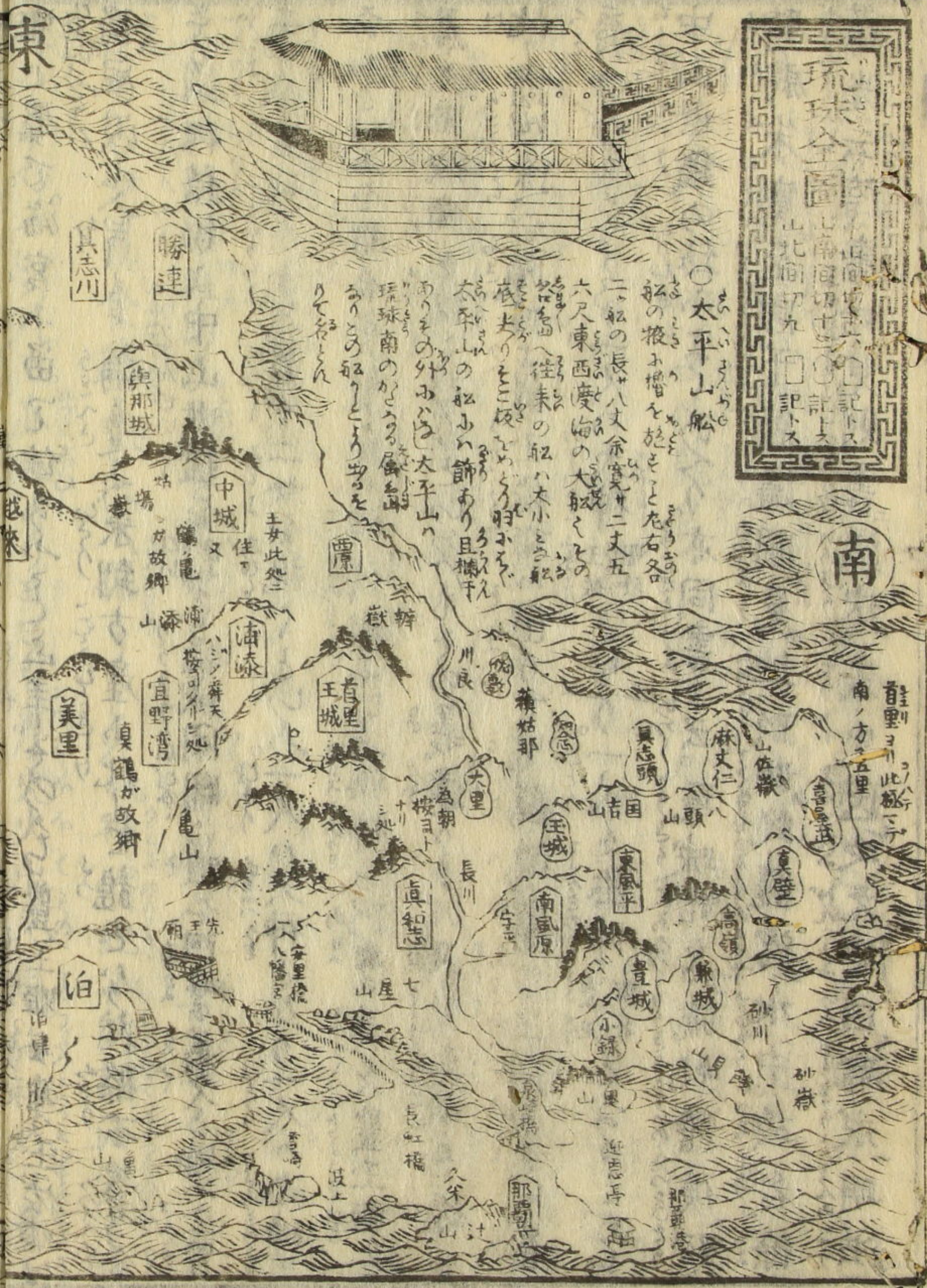
量の説をりてい。おれハ大洋の沖のありて。琉球をいふ。小嶋ハ其  
 屬嶋。鬼界。傳信録琉球三十六嶋の圖説を閱る。奇界亦  
 名鬼界去中山九百里。六町定。為琉球東北最遠之界。人以手食

さるまは  
 ちの備  
 らみ  
 らへ源を  
 せよる  
 を

多黒色云去も云えり。かれは鬼界の琉球の属嶋と詠るるや。こ  
 おほし。又神代紀小海宮海郷とあり。琉球の母なるべし。琉球談  
 お注せられり。下は世俗龍宮とあり。海神の都とある。処少く洋中波底別  
 全殿玉樓あり。と云ふ。既ハ謝在杭ガ五雜俎小論破又  
 蟠龍子ガ俗説粹難と云ふ。愚按ざる。龍宮ハ琉球也。本朝怪談故事  
 小云琉球神道記小云琉球國の王宮は榜とるに。龍宮城と書袋中  
 の日は天宮とあり。琉球とあり。龍宮の義あり。普通ざるゆゑ。欽この國  
 東南に在り。水府の内れ極深の底とあり。龍宮とあり。故あれ哉  
 天龍地龍の社あり。是を天妃とあり。今異國人の菩薩と稱するハ  
 是ことなり。今試ふ。これハ据るとあり。神代紀小所謂海宮と琉  
 球の母とあり。亦經よりとせむ。彦火火出見尊海神の女豊玉  
 姫を娶て海宮小苗て住り。三年。そのとら豊玉姫。女弟玉依姫  
 將風波を冒して海邊に素到方産小化して龍とあり。條下ハ考合  
 小云信録中山世鑑を引く。琉球開闢の祖を阿摩美父とあり。三男  
 二女を生む。長女が君々。二女を祝くとあり。一人ハ天神とあり。一人ハ海神と  
 あり。といふを胎合とあり。神代紀小ハ海神ハ阿摩美父豊玉姫と  
 君々玉依姫と祝くとあり。といふも。その義遠く。且豊玉姫と龍と  
 化し。海途一同て去り。玉依姫ハ苗りて兎鷓草菁不合尊。養  
 育せられ。一人ハ天神とあり。一人ハ海神とあり。とあり。とあり。  
 中山世鑑の録ふよくあり。亦同書云。琉球始名流虬。陪使羽  
 騎尉朱寬至國于萬濤。間見地形如虬龍浮水中。故名徐  
 葆光云陪書始見則書流求。宋史因之。元史曰瑠求。明洪

春八九月月責篇長

琉球全圖



此島は南緯四十二度、北緯十二度、東經百三十九度、西經百一十九度、南北九十里、東西六十里、面積六千七百餘里、人口二十餘萬、言語、風俗、物産、皆異於他島、故曰琉球、其地、山、川、田、園、皆備、故曰全圖、

○太平洋船  
 此の船は長八丈余、寛二丈五、六尺、東西、海の大船、其の、往來、の船、大小、の、船、を、載、せ、る、船、也、

此島は南緯四十二度、北緯十二度、東經百三十九度、西經百一十九度、南北九十里、東西六十里、面積六千七百餘里、人口二十餘萬、言語、風俗、物産、皆異於他島、故曰琉球、其地、山、川、田、園、皆備、故曰全圖、

○日本船  
 此の船は長十丈、寛三丈、其の、往來、の、船、也、

武中改琉球といへりかれば、邦を琉球を宇羅麻乃文介又於  
幾迺志麻と<sup>い</sup>ひ彼処の土人<sup>を</sup>いふ<sup>も</sup>の國を稱して屋其惹といひ  
又流虬といふ唐山<sup>を</sup>て階の<sup>時</sup>に<sup>じ</sup>めて流求と<sup>號</sup>する元の時  
瑠求と書明の洪武年中より亦琉球と更なる<sup>以</sup>受と今ハな<sup>て</sup>  
琉球と<sup>い</sup>ふその國の形虬龍の水の中<sup>に</sup>浮<sup>び</sup>て<sup>く</sup>な<sup>れ</sup>を<sup>り</sup>て流虬<sup>と</sup>名  
づけ<sup>ら</sup>れば中葉その王宮<sup>に</sup>龍宮とも稱する<sup>を</sup>えし虬龍ハ和訓<sup>の</sup>ち  
角<sup>を</sup>ん<sup>龍</sup>なり又和名鈔<sup>に</sup>水神を美豆知と訓<sup>と</sup>又水神の女<sup>は</sup>  
象<sup>同</sup>女といふ神代紀<sup>に</sup>い<sup>え</sup>る<sup>り</sup>これ<sup>の</sup>縁故<sup>を</sup>りて推<sup>と</sup>れ<sup>た</sup>大  
古<sup>の</sup>し<sup>の</sup>海宮<sup>今</sup>俗の稱<sup>に</sup>龍宮城とも琉球の<sup>ゆ</sup>と<sup>あ</sup>る<sup>べ</sup>し抑彼  
國<sup>と</sup>北極地<sup>を</sup>出<sup>る</sup>こと二十六度二分三釐暖氣他國<sup>ハ</sup>勝<sup>と</sup>く  
正月小桃の花開枇杷熟十二月<sup>ハ</sup>氷<sup>を</sup>り蚊<sup>を</sup>を<sup>り</sup>て傳信錄  
月令の條<sup>下</sup>に<sup>い</sup>え<sup>る</sup>その風俗<sup>年</sup>中行事<sup>ハ</sup>近曾琉球談<sup>と</sup>  
いふ<sup>の</sup>中山傳信錄<sup>に</sup>畧解<sup>し</sup>琉球事略<sup>琉球聘使記</sup>中山世  
譜<sup>定西法師傳</sup>ホの説<sup>を</sup>ま<sup>じ</sup>り<sup>て</sup>記<sup>さ</sup>れて粗世俗<sup>の</sup>ある<sup>と</sup>ころ<sup>ハ</sup>な<sup>ら</sup>ば  
く<sup>も</sup>あり<sup>し</sup>つ<sup>の</sup>編<sup>ハ</sup>為<sup>朝</sup>琉球<sup>ハ</sup>漂流<sup>し</sup>その子舜天<sup>ハ</sup>彼國  
小<sup>王</sup>と<sup>い</sup>は<sup>し</sup>又<sup>述</sup>され<sup>ば</sup>更<sup>ハ</sup>蛇<sup>足</sup>の<sup>辨</sup>を<sup>ま</sup>その<sup>三</sup>丸<sup>琉球國</sup>  
三省<sup>の</sup>中山<sup>と</sup>中頭省<sup>山南嶋嶺省</sup>山北國頭省<sup>こと</sup>なり  
三省<sup>の</sup>屬府<sup>と</sup>て<sup>三</sup>十七<sup>これ</sup>間切<sup>稱</sup>間切<sup>の</sup>方<sup>あり</sup>  
郡縣<sup>の</sup>類<sup>なり</sup>べし<sup>首</sup>里<sup>を</sup>り<sup>て</sup>王宮<sup>と</sup>し<sup>恩</sup>納<sup>を</sup>り<sup>て</sup>五<sup>嶽</sup>の<sup>首</sup>と<sup>い</sup>  
その圖説<sup>の</sup>ど<sup>と</sup>れ<sup>ハ</sup>傳信錄<sup>に</sup>い<sup>え</sup>る<sup>り</sup>この編<sup>の</sup>列傳<sup>の</sup>の<sup>く</sup>彼書  
小載<sup>した</sup>人物<sup>ハ</sup>拔萃<sup>して</sup>私<sup>に</sup>名<sup>を</sup>設<sup>と</sup>又<sup>右</sup>圖<sup>を</sup>れ<sup>一</sup>張<sup>也</sup>  
同書<sup>の</sup>に<sup>莫</sup>寫<sup>ふ</sup>た<sup>り</sup>の<sup>な</sup>す

春紀長月貴書卷十一

海上幡森  
重結子  
月中丹桂  
又生枝

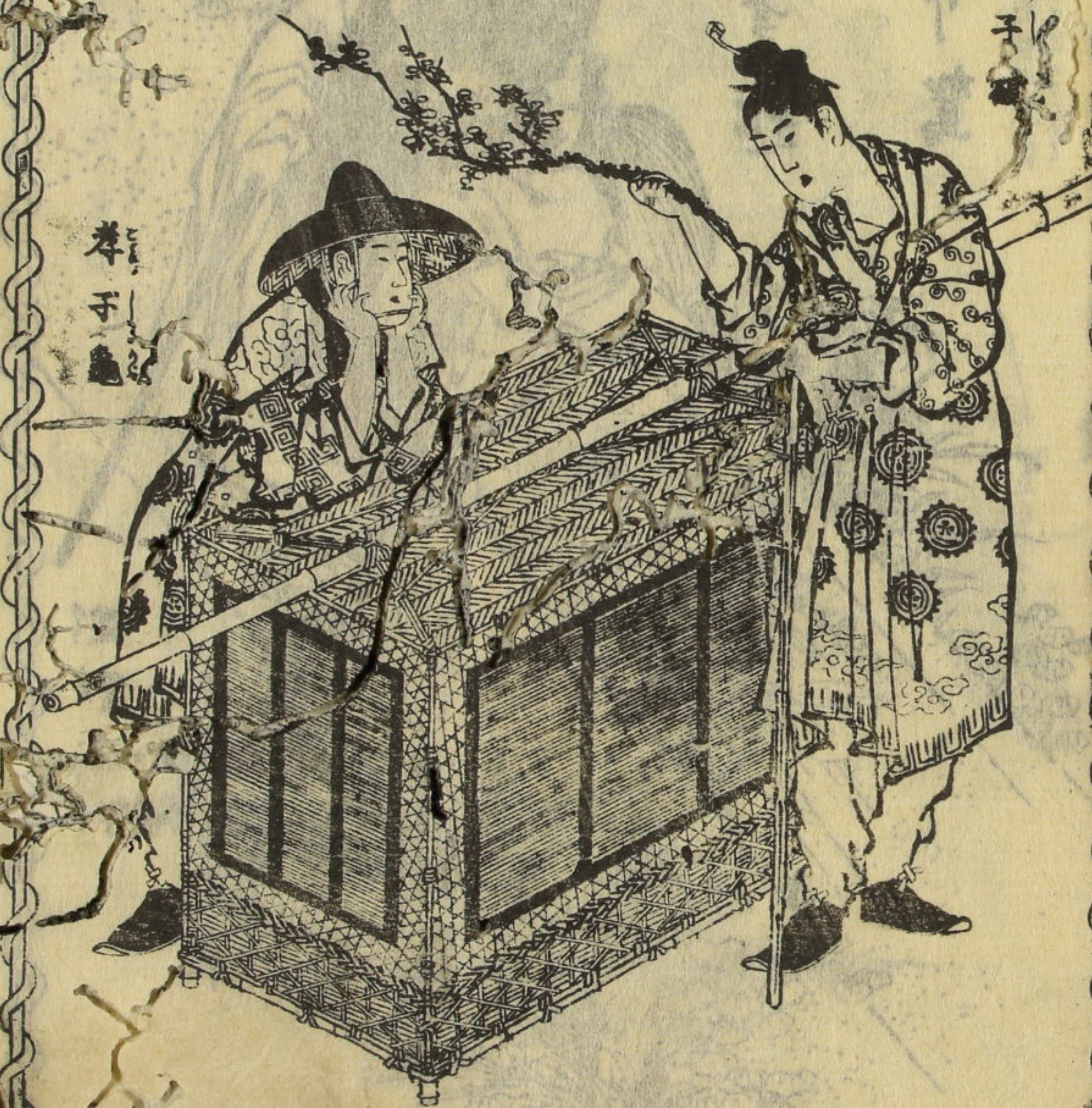
舞天玉源尊教



昨夜深  
園雪第  
寒兒不  
上庭前  
看玉樹  
賜斷忙  
連枝

孝子

孝子





曲路幾亭起  
昂徑  
虹樓一帶駕  
波濤

膝  
雲

紫中官南風原

松影映  
池龍戲水  
梅  
花落地  
蝶  
翻風



真鶴



王中婦君



人心生一念天地  
悉知善惡若無  
報乾坤必有

中城按司毛國鼎

社稷保命維死芳  
名不墜細常振立  
雖亡生氣攸存

里  
松壽

本言... 卷之...

鎮西八郎為新傳椿説弓張月續編德目錄

第三十一回

為朝水行赴京

第三十二回

忠魂憑鱗救幼主

第三十三回

毛國鼎忠説破利勇

第三十四回

寧王女捨身議救民

第三十五回

真鶴孝烈赴北谷

第三十六回

尚寧王腰輿登高嶺

第三十七回

毛國鼎命赴小琉球

第三十八回

一夜夫婦守永訖

第三十九回

浦添山國興逢使者

第四十回

沃淚松壽擊廉夫人

第四十一回

顯神白縫祐寧王女

白縫披瀾沒海

相傳吹氣甦殊劫

君與物神出現王宮

廉夫人逢妹更悼母

國鼎勇敢拉河公一

舊虬山古墳現曠雲

寧王女捧珠歸龍宮城

鏡中幻術割骨肉

中山廣利勇殺忠臣

顯神白縫祐寧王女

松壽月前殿妻屍

第四十二回

直國吉仗我戰中城

第四十三回

撈喚阿公棄赤子

第四十四回

尚寧王戲言喚禍

第四十五回

狹偽王子利勇聚軍兵

統計四十五回其三十回以上出于前後二編

續編六冊目錄終

拾遺六冊

嗣出

鎮西八郎椿説弓張月續編卷之一

東都

曲亭主人編次

第三十一回

為朝水行より京不赴く  
白縫瀾次披て海に没む

人皇八十代高倉院の安元二年丙申の秋八月十五日のころに

鎮西八郎為朝之肥後國北郡水原の浦より秘出して主從僅お

三十餘人潛り華洛に推渡す。清盛を担擧す。先を雪二人

らて獵狐二艘小乗をりたり。その一艘ありて朝白縫をりて針盤

をとる。九餘人の郎黨相從し。亦一艘ありて為朝の嫡男舜天丸

赤子をりて白縫の妻をりてを大將とし。八所隸紀平次大夫高間

太郎夫婦。高間をりてこの傳れ十餘人の郎黨相從す。この日天

真鶴身後は主自

西孝子擡轎走越來

流花鶴見亡父

中婦君惡報見創

よく晴く一夏に雲なく。渺くは洋中。波静にして。順風ふけの帆  
揚ぐれば。日へくや入て。月へ海より。こし昇て。頃しも秋の最中。多  
は金波谷が漏り。玉免浪を走り。汐風いふ冷やなり。かくは時方  
いかくあるまうに。霧いとぬくならこめて。遊人の間も。えんたかき。詠  
と潮ふり。とげん午の比及。不霧の膏くれと。何れの澳も。おひこり。し  
時。魚のり。その状。鯉の如く。はして鳥の翼のり。蒼文。白首。嘴赤く。其  
音。鳶雞に似て。波の上。群りおぶこと。いくと。このあはれ。と。且て  
水面。撫と泡を。ちりて。米糟を散せ。ごとく。夥の海蛇。浮出。船の左右  
ふ充滿。これ。と。り。み。あ。ご。と。と。衆皆面を。あ。し。つ。る。ひ。惑。ま。る  
その。し。當下。為。朝。水。と。天。との。景。迹。お。目。を。つ。けて。大。は。驚。れ。白。縫。姫  
其。真。の。ち。り。され。西。國。小。成。長。り。又。伊。豆。の。嶋。に。十。年。の。春。秋。不。か。り。し  
か。を。渡。海。の。風。信。自。然。ふ。く。し。大。約。南。海。を。二。月。清。明。の。ち。地  
氣。南。より。北。ふ。ゆ。く。と。成。り。て。南。風。を。常。と。し。又。九。月。霜。降。の。後  
地。氣。北。より。南。ふ。ゆ。く。と。を。り。て。北。風。を。常。と。し。り。其。の。例。も。互  
と。た。へ。風。の。怒。ふ。事。こと。は。し。これ。大。風。烈。や。れ。を。颶。とい。ふ。又。甚  
と。と。か。颶。と。稱。ふ。颶。へ。常。か。驟。か。起。る。颶。と。漸。の。り。て。あ。る。と。颶。を  
瞬。の。ら。ら。ふ。發。り。て。倏。お。止。る。颶。へ。一。昏。夜。或。ハ。數。日。止。る。は  
止。り。て。正。二。之。四。月。を。颶。お。は。し。五。六。七。八。月。へ。颶。お。は。し。渡。海。の。船。颶  
お。遇。ふ。れ。へ。の。月。脱。る。こと。の。り。り。颶。お。遇。ふ。れ。の。當。が。は。十。月。以。後  
ハ。北。風。常。お。化。る。と。う。れ。も。颶。お。定。期。な。し。五。六。七。八。月。ハ。南。風。お  
颶。の。り。その。風。發。ら。ん。と。それ。と。は。北。風。年。々。至。り。然。れ。ど。東。南。と。る。り。  
又。將。て。南。と。な。り。亦。將。て。西。南。と。る。り。颶。の。し。じ。め。で。發。る。ん。と

春花月讀篇卷之二

十一

ことばにたふさぶる形より西陣る。そのとら半天一朶の雲出づ。うら  
 新虹のごとくたりのあり。これその意あり。又胎の起るとは帆のごとく  
 雲出づ。又半朶不及と。稍驚の尾小似と。雲とあられは。その前  
 象なり。驚と蟹小似て。南海は生と。十二の足腹の両旁より。出眼  
 と背の上小ありて。その口ハ腹の下小あり。その海を過る。毎小  
 相負く。背を示し。風舟乗じて。托行と。海人これを驚帆と呼ぶ。其  
 皮較甚堅し。異國の人これを冠小ととり。あれえ。今も  
 又驚舟似と。れ雲半天小あり。嘗て。蛇發らんと。それハ海水穢れ  
 泡と。て。海蛇駭水上小浮と。文鯨魚群て。舵工これを入る  
 と。れハ。ふく。怕と。遠く慮りて。帆を收め。舵を嚴重はして。これハ。避  
 け。唯備速る。これハ。弘忽地は傾覆すること。今。今。今。の不詳

采心く備る。そのもの。な。て。帆を。あ。れ。と。り。れ。ま。れ。多。く。ハ。自。縛。堀。を  
 さ。り。形。り。衆。皆。舌。又。振。り。驚。れ。睨。つ。帆。を。引。ち。し。と。て。碇。を。あ。ら。え  
 と。と。れ。ふ。底。ふ。く。して。その。綱。さ。く。さ。り。も。あ。ら。れ。ハ。と。い。う。事。せ。ん  
 と。て。い。う。周。章。と。浩。処。也。遙。小。後。と。り。け。れ。舜。天。丸。の。帆。中。や。や  
 に。乗。著。て。回。ら。り。く。體。な。し。八。所。礮。犯。平。次。高。間。太。郎。亦。抽。先。也。堅  
 略。主。の。船。も。對。し。や。う。ひ。や。う。今。曉。り。狹。霧。ぬ。く。な。ら。こ。め。て  
 船。の。ゆ。く。所。を。あ。ら。び。東。へ。赴。く。べ。れ。船。の。南。へ。航。され。と。あ。ら。じ  
 加。旗。何。と。う。海。の。氣。色。の。怪。しく。又。え。ぬ。君。あ。ら。い。う。か。お。し。や。ん  
 中。ん。と。同。と。為。朝。見。え。り。て。汝。速。が。い。ふ。と。く。が。船。南。へ。漂。流。せ。し。ふ  
 疑。ひ。は。故。い。く。み。と。な。れ。バ。文。鯨。魚。の。群。が。り。お。ぶ。を。り。て。足。と。あ。ら。り  
 彼。魚。ハ。南。海。よ。り。交。し。お。り。あ。ら。ふ。薩。摩。海。を。去。る。と。と。数。十。里。か。れ。に。し

春長月續書卷之一

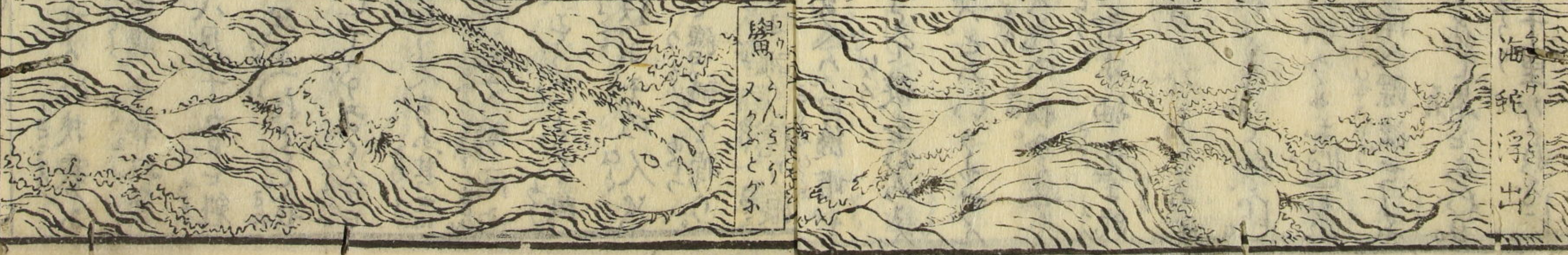
文鯨魚群飛



海鏡浮出

又よ半天も怪しむ雲あり。且水の上は海鏡  
 夥しく出する。即悪風起るとする。前  
 象され。今これを避んとす。に船に入る  
 へた港口は。只舟を空して死に候ひ。と  
 命の係るところ。され小旗とて。人々を  
 あはれ。今さう。致さく。みうり。と。田舎の  
 件の。舟人眉を顰め。あうりと。さう。も。知つ  
 これを防がれ。の。智の足。と。され。小似り。船  
 大に。ち。な。れ。ハ。風。波。も。輒。く。傾。覆。さ。す。至  
 ら。と。稚。君。の。正。船。と。殿。の。正。船。を。結。ぶ。と。連  
 環。し。衆。人。カ。を。戮。して。艘。あ。ら。ば。い。う。て。必  
 死。を。脱。止。ま。り。う。ら。ん。と。信。が。ら。て。既。に。纜。を  
 投。り。ん。と。す。れ。を。為。朝。急。み。押。さ。り。汝。達  
 の。言。差。へ。り。親。子。と。ら。ん。船。よ。あり。て。その  
 厄。難。を。免。じ。く。喜。ん。ん。と。究。り。て。宜。う。と。い  
 う。が。主。後。に。十。餘。人。命。凶。なる。り。の。の。こ。ま  
 り。の。か。の。網。も。入。る。魚。も。十。二。三。ハ。脱。り  
 り。の。舟。柳。為。朝。伊。豆。の。大。嶋。よ。あり。と。い  
 う。ら。ち。や。う。以下。の。七。鳴。も。往。来。し。早。潮。黒。潮  
 の。灘。を。す。す。屑。と。せ。と。千。里。の。波。濤。を。家。と  
 して。一。下。と。び。も。大。風。も。吹。流。され。る。さ。う。う  
 了。此。皆。是。神。仏。の。擁。護。あり。と。似。たり。と。う。る

春急月讀

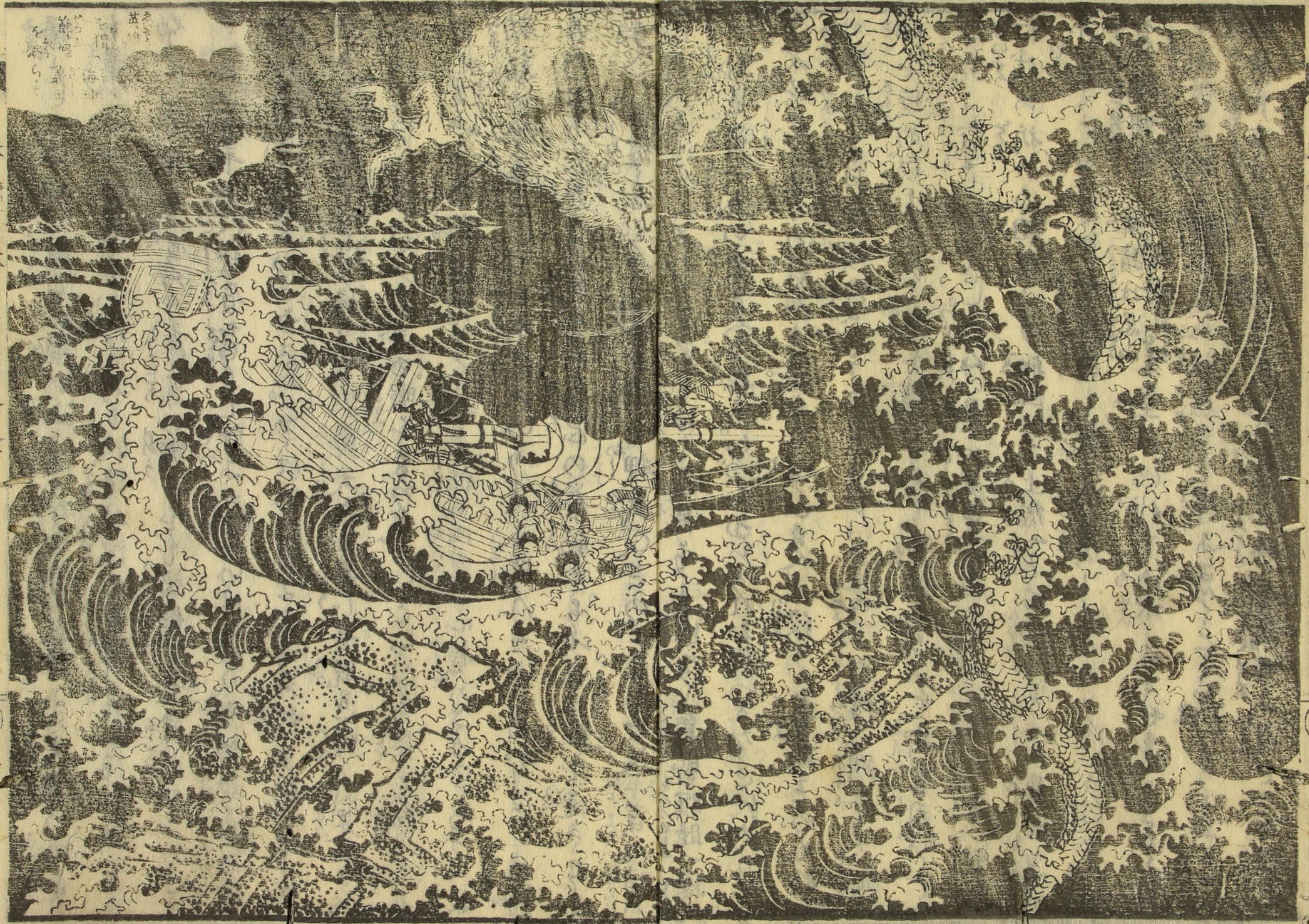


海鏡浮出

鯨

今今華浴ふ推渡り。君父の仇は清盛が担持んとす。に扶養ふ  
 舵をとり愕て刺風濤の難ふ。親子主後悉く。大魚の腹ふ葬れまは  
 天より命なり。そへて一年十二月悪風の發る日あり。八月十五日と魁  
 星魁と稱と箕壁翼軫の四宿を起る風を起る。主れとと我  
 これをあらざるにあふびさの魁星魁の日期ふ船出してみせく。今日  
 小至く船よあり。とても脱がれ主従が命あふびや。といくふ其言  
 いまを説らし。船の前後ふ龍あふりて水の沸るる。二之文瞬間お  
 風颯と吹来る。波とそわれ天驟ふ結凍。大雨ふ盆を覆とらごとく。陣  
 ちだ。四方野于玉の鳥夜と有りて面がぬとせむ。送ふその人々  
 へんぞ。只声をあふとして。おのく罵り而し力を裁して。船を操り。  
 命がとりに働けども。風雨もよく烈くて。船を只音ふ跳り。浪  
 を打ふる。ことあづく。水を浚乾き。舟は遠く。衆皆瞑眩て。撲地  
 と。仙と舜天丸の乗も。船も。いづらゆたえおほつらなさに。ありとも  
 へんぞ。もあふ。其処ううと。嘆びまふ。後と。答れそのも。おろく。  
 吐嗟船と。目今傾覆せう。ええりける。當下白煙ハ。潮垂る。雨の  
 袖を絞あげ。より。足を踏う。あて。声あがり。て。御曹司がて。の  
 万死よ。一生と。いふ。傳。景行天皇の四十年。日本武尊。東夷  
 征伐の折。相模より。船出して。上総へと。赴た。あふ。暴風。忽地  
 小起。皇子の。船漂蕩し。既。傾覆。んと。あふ。し。は。その。妃  
 茅橋姫命。穂積。忍山。皇子に。代。入水。と。せ。ま。り。さ。る。よ。ら  
 て。風波。支地。軟。て。船。恙。あ。岸。あ。つ。こと。お。り。と。そ。君。が  
 武勇。日本武。る。ま。あ。り。あ。つ。あ。心。操。身。橋。姫。不。及。と。も。此。身。を

春記 長月 續言部別居録



春  
天  
日  
出  
景  
物  
卷  
之  
一

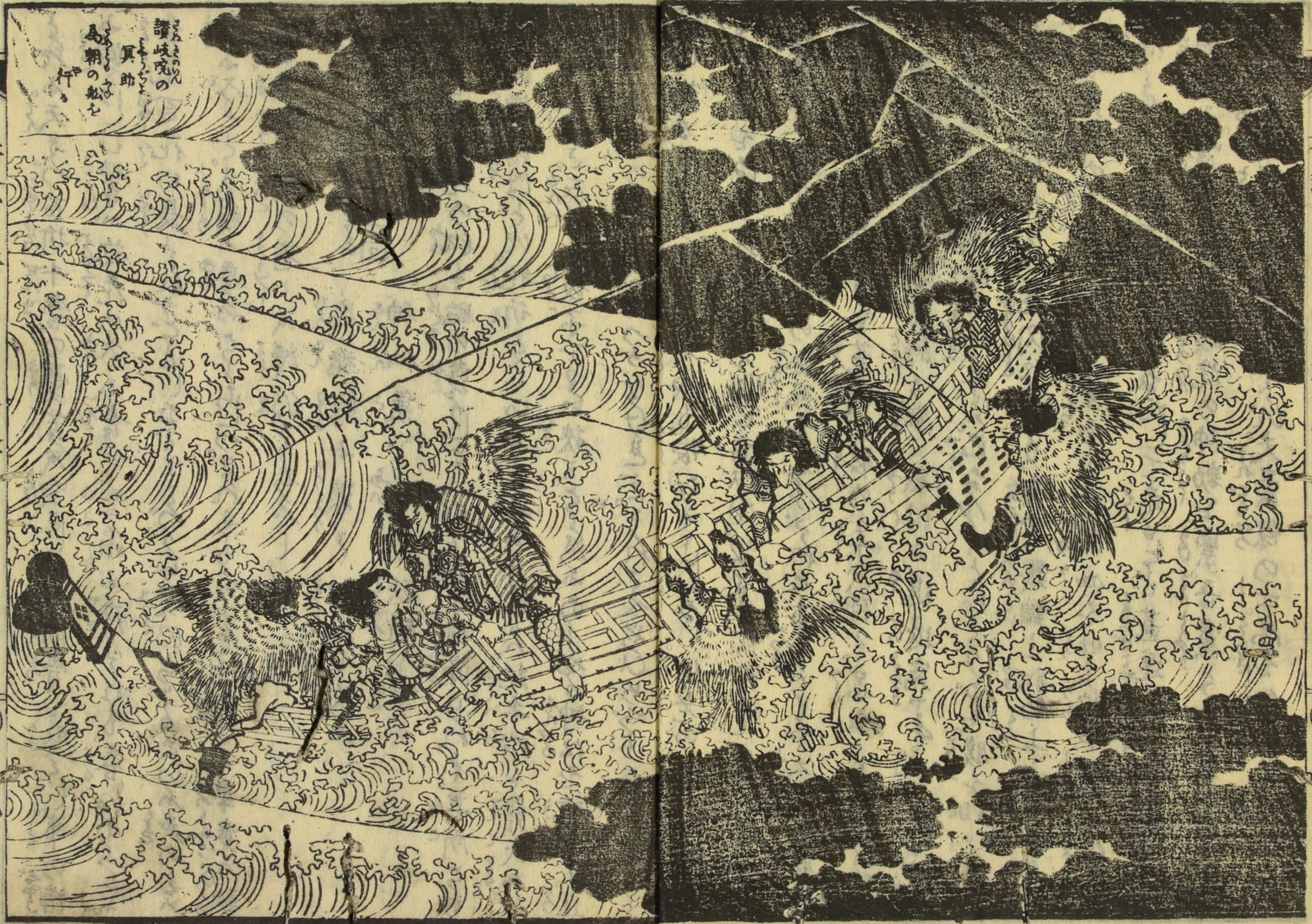
春  
天  
日  
出  
景  
物  
卷  
之  
一

五



儀として海神へ献らるる風の止るるやのめれ往ぬ夫婦の再會  
 も量ぐとどめひくし作りつるに續岐院の荒神矣おんりつじこ  
 ぬくしと環會多り。年月の懶さをも詰慰めて昇天丸とりあ子  
 入奉七幸が経存眉をりて既志志といじり。夫婦親子れ愛惜  
 哀別離苦のなるかとなさる。とにいにい場をさうのけねとらう  
 ひとりを捨て。君り落さもに昇天丸も辛じて脱退は足ま  
 僥倖のみし。今ハもや弟の暇をあらるるじ。といひも果を蹴り入ん  
 としあふを。為朝連忙しく抱と住め。弟が心操ハさることあづ。我  
 勅勅の配軍として日本武のいあへみ比んといもかじし夫婦  
 りあさもに死るる死るる。兼忽の奉勅もあな。と理を述るるさ  
 多人ハ白燈と。そり落る涙を押し。さのさすのさ一言の情ハ  
 絆とあるりのか。妻續岐小ありしと新院百ありけささし  
 多のさす。汝亦夫婦の縁。既中後くれども。その志の切あをりさ。  
 下さびハ環會とべし。これいふ。夫よあも。又いふ。行もさ離別  
 せん。努くうらむるさなれと説示さひぬるハ。さのさすあづ  
 かり。かたれるの。君もさひ當りまづれお。さあさあさいと理は。源家  
 氏の太神男山正ハ幡肥後國中。銘す阿蘇の明神。てて續岐  
 院の荒神矣。哀愍又納の睦をえし。ハ大龍王感應。あて良く  
 じ。ぬ中。の黨ハさ。那り。さ子。の船も。羨ま。羨の。さ。吹さ  
 多人と高々に祈請し。いとめられし袖あり拂ひ。瀾を披きて千尋  
 の底へ身を跳らして没多め。あられさ。那さ。最期あり。あられさ。風  
 雨ハまほ止じ。て海の鳴音凄しく。船ハ鞠を蹴ること。高く揚りて

半天に至り。或の傾けおらりて浪よりも低く。洗とも中らば浮ゆ。中  
 車に餘人の郎堂の白縫入水ある。あつとくも。後お推心するを。今  
 へまうとまひとえ。後おまひとて。やうやくに身と起し。吾們木原山お  
 ちりつ久しより。以来余ハ君おたてまつりぬ。倘琴高が鯉お躍り。  
 列子ガ風お御るおあつびぬ。脱とあつて。おおげえと。誘多人死出  
 の先登つうまあるを。しとひも果ぞ。おのく刀を引抜て。或とこじ  
 らぐ。或の腹うけ切り。後より。將隨て名をさふあつぬ。北海の底  
 の水層と折りあつり。為朝ハ目今白縫をこじめあつて。北海人  
 の郎堂が入水とつて。数回歎息し。とも清盛が運の強  
 さよ為朝必死の兵士をばて。華洛へ潜のる。そのあつぬ。這奴が  
 首をばへりし。龍神さん世おつれて。あつて。平氏お荷擔とつて。愈  
 運の竭方とつて。世をむく。恨しおよし。借老の妻を殺し。こ  
 足のちひをばし。郎堂をらしむ。ひつ。りつて。かくて。あつて。天丸  
 が船ゆくへまう。なりて。その生死とあつた。れども。今ハとや。大魚の腹中  
 おあつんぞ。ん。ちひとや。荒磯ハ駿の年おぼく。悪なるけり。のが。  
 中宿志が果とつて。それ時お臨と。風波お進退究マて。世おあつる人も  
 の。海の。八重の潮踏お沈ん。己とつて。おつて。腹を切んとし  
 ちあ折ら。怪す。た。お電閃れ。り。玄雲。驟と。船の上お天降り。  
 異類。異形の天狗とも。眩おまぬ。れ。困伽を吐し。蛇を把りて。働け。ね  
 ち傾。し。お。忽地おあつる。は。して。走る。こと。甚速し。時お天狗とも。異  
 ち同音おあつり。た。れ。の。讚岐院の神勅を。稟。吾黨ら。に。あ。つ。て。お  
 を。せ。る。為。朝。率。介。お。死。さ。べ。く。ん。び。夫。豪。傑。の。士。志。を。舒。名。を。揚。へ。と。する



讃岐院の  
真助  
鳥朝の船  
行

春説弓張月續繪卷下

春説弓張月續繪卷下

とん天<sup>てん</sup>すづ百折<sup>ひやくせつ</sup>千磨<sup>せんま</sup>石<sup>いし</sup>の憂<sup>うれ</sup>苦<sup>く</sup>火<sup>か</sup>喫<sup>く</sup>はし。その筋<sup>すぢ</sup>骨<sup>こつ</sup>を堅<sup>か</sup>りし。事<sup>こと</sup>の情<sup>じやう</sup>  
おぼらしむ。壁<sup>かき</sup>言<sup>ご</sup>ハ梅花<sup>ばいげ</sup>の冬<sup>ふゆ</sup>小<sup>こ</sup>會<sup>かい</sup>く。雪<sup>ゆき</sup>霜<sup>しも</sup>も瘦<sup>やせ</sup>くねも。春<sup>はる</sup>にめく。  
香<sup>かう</sup>氣<sup>き</sup>百<sup>ひやく</sup>花<sup>か</sup>の長<sup>なが</sup>くれがごとし。まどてらうら曉<sup>さつ</sup>ほららる。その声<sup>こゑ</sup>のこい  
耳<sup>みみ</sup>ふ入<sup>い</sup>と。為<sup>な</sup>朝<sup>あさ</sup>ハ夢<sup>ゆめ</sup>のうららじつ。それあもあふて忙<sup>いそ</sup>然<sup>ぜん</sup>と。畢<sup>ひつ</sup>竟<sup>じやう</sup>為<sup>な</sup>朝<sup>あさ</sup>  
の安<sup>やす</sup>危<sup>あや</sup>如何<sup>いか</sup>。次<sup>つぎ</sup>の巻<sup>まき</sup>く次<sup>つぎ</sup>讀<sup>よ</sup>むとくあふし。

第三十局

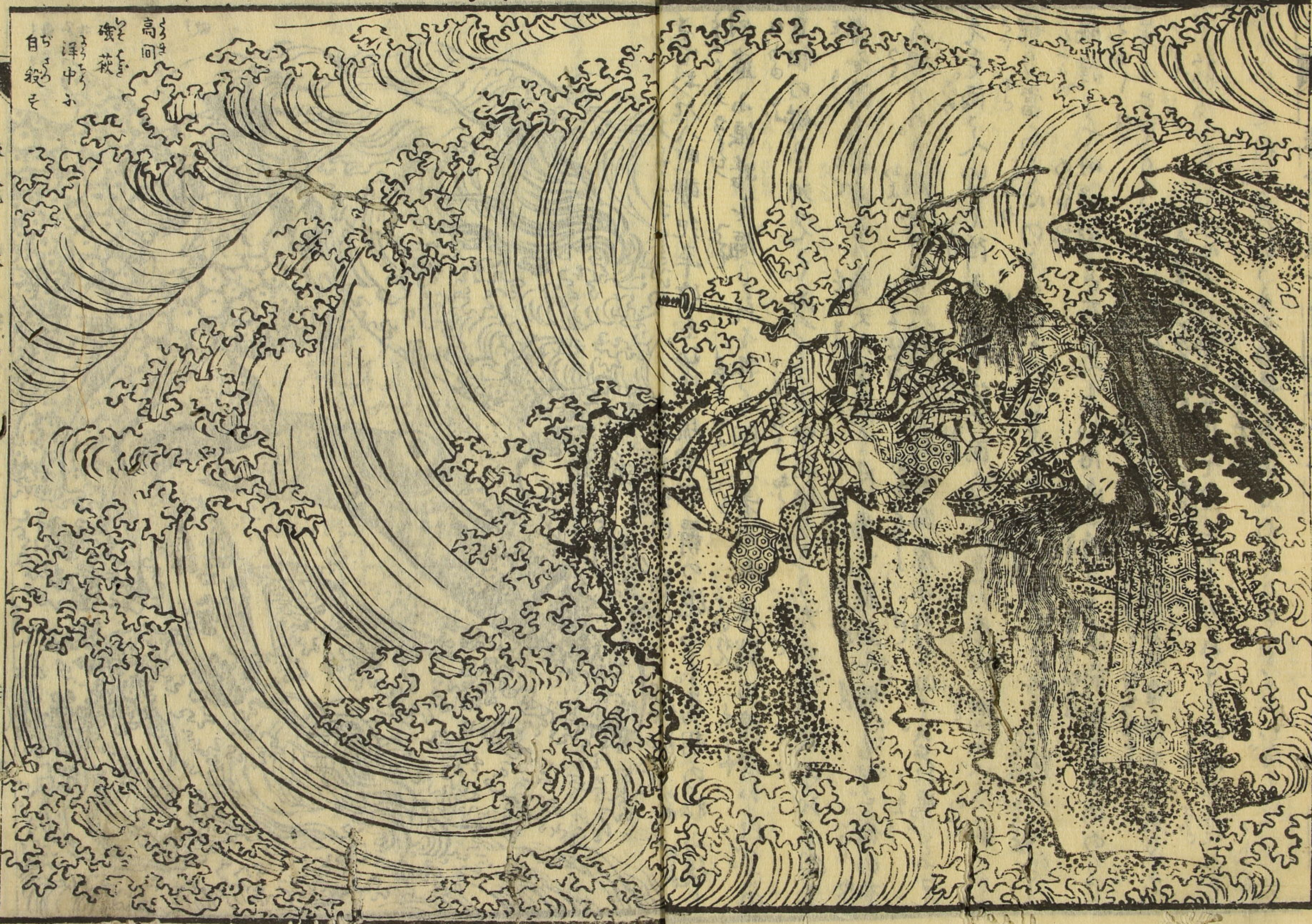
忠<sup>ちゆう</sup>魂<sup>こん</sup>鰐<sup>ゐ</sup>小<sup>こ</sup>憑<sup>より</sup>く。幼<sup>ちゆう</sup>主<sup>しゆ</sup>を救<sup>すく</sup>ふ  
神<sup>かみ</sup>仙<sup>せん</sup>氣<sup>き</sup>と吹<sup>ふ</sup>く。殊<sup>こと</sup>折<sup>せつ</sup>を魁<sup>かゐ</sup>と

さても舜<sup>しん</sup>天<sup>てん</sup>丸<sup>まる</sup>の松<sup>まつ</sup>を。庭<sup>にわ</sup>の發<sup>はつ</sup>りしとん。あふ浪<sup>なみ</sup>は揺<sup>ゆ</sup>隔<sup>へ</sup>られく。其<sup>その</sup>所<sup>ところ</sup>も  
あふ漂<sup>ひら</sup>蕩<sup>たう</sup>はどに。船<sup>ふね</sup>折<sup>せ</sup>とく。いとうとんりし。紀<sup>き</sup>平<sup>へい</sup>治<sup>ち</sup>と舜<sup>しん</sup>天<sup>てん</sup>丸<sup>まる</sup>  
右<sup>みぎ</sup>手<sup>て</sup>小<sup>こ</sup>抱<sup>いだ</sup>と。左<sup>ひだり</sup>手<sup>て</sup>小<sup>こ</sup>板<sup>いた</sup>子<sup>こ</sup>と。其<sup>その</sup>狭<sup>せま</sup>と。うねあふゆる神<sup>かみ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>を祈<sup>いの</sup>念<sup>ねん</sup>。且<sup>かつ</sup>  
為<sup>な</sup>朝<sup>あさ</sup>白<sup>はく</sup>蓮<sup>れん</sup>のうも。おがつらなげと。それうもひめづと。不<sup>ふ</sup>違<sup>ちが</sup>ひ

夫<sup>その</sup>前<sup>まへ</sup>太<sup>たい</sup>郎<sup>らう</sup>と。磯<sup>いそ</sup>藪<sup>さく</sup>と。十<sup>じゅう</sup>餘<sup>じゆ</sup>人<sup>にん</sup>の傍<sup>そば</sup>草<sup>くさ</sup>以<sup>も</sup>勵<sup>り</sup>して。こゝに先<sup>ま</sup>途<sup>と</sup>  
と倒<sup>たふ</sup>けと。刀<sup>やいば</sup>完<sup>かん</sup>て勢<sup>いき</sup>ひ竭<sup>つき</sup>く。即<sup>すなは</sup>座<sup>ざ</sup>死<sup>し</sup>と。ありの五<sup>ご</sup>七<sup>しち</sup>人<sup>にん</sup>小<sup>こ</sup>及<sup>およ</sup>て。其<sup>その</sup>  
患<sup>うれ</sup>難<sup>なん</sup>比<sup>ひ</sup>る。ふりのおりねし。え事<sup>こと</sup>必<sup>かな</sup>死<sup>し</sup>と。必<sup>かな</sup>ひ定<sup>さだ</sup>めし。主<sup>しゆ</sup>後<sup>ご</sup>か。今<sup>いま</sup>  
命<sup>いのち</sup>を惜<sup>おぼ</sup>む。多<sup>おほ</sup>くねど。敵<sup>てき</sup>小<sup>こ</sup>當<sup>あ</sup>りて。志<sup>し</sup>をいし。武<sup>ぶ</sup>名<sup>な</sup>を後<sup>ご</sup>の世<sup>よ</sup>に。難<sup>なん</sup>  
と。西<sup>にし</sup>も東<sup>とう</sup>も。ありあられ。稚<sup>わらわ</sup>君<sup>きみ</sup>をさへうし。あひ。あふ痛<sup>いた</sup>む。  
あふ公<sup>こう</sup>ら。して。叫<sup>こゑ</sup>へ。と。声<sup>こゑ</sup>もた。わ。こ。磯<sup>いそ</sup>と。輾<sup>ま</sup>び。く。起<sup>た</sup>る。こ。  
と。あふ。あふ。海<sup>うみ</sup>小<sup>こ</sup>。弘<sup>こう</sup>誓<sup>せい</sup>言<sup>ごん</sup>の。松<sup>まつ</sup>を。ま。つ。を。かり。紀<sup>き</sup>平<sup>へい</sup>次<sup>じ</sup>も。今<sup>いま</sup>ハ。と。て。膝<sup>ひざ</sup>ふ  
うたのし。れ。舜<sup>しん</sup>天<sup>てん</sup>丸<sup>まる</sup>。さ。ま。ち。なる。も。と。あ。り。は。し。そ。の。念<sup>ねん</sup>佛<sup>ぶつ</sup>と。う  
と。目<sup>め</sup>お。松<sup>まつ</sup>と。巖<sup>いわ</sup>と。撞<sup>つ</sup>と。雪<sup>ゆき</sup>り。て。滅<sup>めつ</sup>裏<sup>り</sup>と。と。碎<sup>くず</sup>散<sup>さん</sup>り。浪<sup>なみ</sup>うら。被<sup>ふ</sup>ぐ。主<sup>しゆ</sup>  
後<sup>ご</sup>が。うら。あ。げ。ら。れて。ハ。又<sup>また</sup>沈<sup>しづ</sup>む。生<sup>なま</sup>死<sup>し</sup>流<sup>りゅう</sup>轉<sup>てん</sup>の。公<sup>こう</sup>苦<sup>く</sup>海<sup>かい</sup>屍<sup>し</sup>ハ。相<sup>あ</sup>抱<sup>いだ</sup>ま。て

濤浪の難子濁ひ魂を相伴と海苔の堂と至ん憐れん嗚呼  
 悲しむるにそが中に高間太郎のうろ判られ壮俊なるの碎  
 れをこぼく磯萩とよと組われ彼の底お沈まらざらんはも  
 巖の上おうら揚られからうして死を脱とれども外お助れ松も  
 りし舜天丸入水お多ひつるに後とをうん不忠なり稚君の  
 と悔てかへりて大船の山船今るは傾覆として漂ひぬる  
 ころ魂魄の守護も守り縦人なれ鳴なりとも恙なく  
 岸およせ進ませらん武士の家お生息し月の病て死るんを本意  
 ろらねどひひびく溺死せんより吾妹子をもまかけて自殺せ  
 ぞとせしへお中りうろしは身はさもせのやといふ声もよりのし  
 をとえんちりたる夫の心中推量り依萩の潮垂る額の髪をかきむりていと苦し  
 けお自心ぬ吻も婿夫の契縁をせし夫の刃おかれ事過世あう  
 結ひん縁とこそ喜しけとありあれど遺憾とこの年おん傍に  
 ありてして給事せし白蓮姫亦恩高とて君のいうおんは  
 ともろぶひそれえんかかてあれおちり傳さなる稚君を浪お取  
 じたる身の後お眞土少て君は夫婦お舜天丸のいうおあつれと  
 別とあつてこそは面をけつらめせめて吾儕の魂におん亡骸  
 とも衛備の舊の浦回お著せかれせ水朕人の手と借りて  
 なる般若の航お乗かえそ彼岸お登るおぼし世おあるとれん教  
 うらむ憂おへられぬ吾們とて忠信節義を人たるお竭えん  
 ひ竹のりの灰況今も昔も例さくおき名おつれそひもお姫君  
 の心烈と女のかかごとと闇れ処を照しす神も仏もありあら

ありつかれ厄難を救ひ多のぬらいうまぞや。應験と申す冥助と  
申す。物の奇特もなれ世いと恨の場りかきは説いといふ。玉子の血の涙。  
巖小落くへ方小是彼東海ありといふ。珊瑚の枝小異なるべ。  
高間これをばてうらち改られも右こそおひふられ入と寂期の一念  
みよんく生引ぬらび浪の輪がれ隙みとくく追著ちり。後れ  
ものる歎いと送し諫めいとめられいと白々なれ破萩が胸のわら  
へ閃く刀尖とさしけり。くなく下急ぐ。こと噴る血刀とさりまはす。  
高間太郎も腹一文字かき切らり。されば平常の風をさす。控とすを  
ある紅蓮の浪の下小布とく夫婦り屍と沈と果ゆると良とさす。  
この時の景迹をえいへくえくわらばれれど後小かくやと推量り。孤  
忠若節を語り続ぐ。物書人書記。世の口順とならるるさす。是と  
さておれ八町磔紀平次と。いじ琉球那覇の港ゆく。為朝の船小後し  
付違ふ浪路を隔れれを救く。淵に著れ水戯の達者なれば。この  
日船の破り。やえと。みづら水中に躍り入り。たまも板子。め  
月を深し。右まも舞天丸を高くは揚て。波風を物もせ。命の衣  
ん環りつと。酒が。只渺と。青海原小舟でゆく。され鳴くおえ  
えと。雨えい。陣とて。海の面くけと。あ。船入へ。暮  
探り當ら。心のこ。猛たれど。その牙鉄石小あり。はれ。終小。真へ  
暎。撓。吐。嗟。溺。と。死。と。べら。お。ね。え。折。う。違。前。面。小。を。の。の。り。て  
見。光。と。光。り。り。り。の。の。の。神。佛。の。擁。護。み。く。倘。稚。君。の。命。助。り。る。あ。り。や  
と。飲。く。心。力。を。励。し。辛。じて。同。ら。か。く。な。れ。う。に。晴。を。定。め。る。  
な。れ。ハ。こ。の。つ。り。め。その。長。文。余。も。あ。い。ん。と。さ。す。く。は。ん。の。り。は。真。



高回  
浪花  
洋中  
自殺

春  
浪  
花  
浪  
花  
浪  
花

春  
浪  
花  
浪  
花  
浪  
花



半身を水の口にあはしつ。その赫奕たるの彼が眼の光るあゝと  
ありては紀平次はこれをもとく大に驚き。嗚呼。主従との悪魚の腹  
を肥せよ。腰刀の佩とれども。稚君を抱きとりて。いづれをさすか。段  
乃んばや殺しほりとも。外に援たりのなれむ。とても活るはたも  
あはぬ。お怖う。ことごとく。あはく。お母。ひとえ。おれも。中。退。さ。も。せ。ご  
おと。浪。間。を。洞。ぐ。む。ど。は。悪。魚。を。忽。地。紀。平。次。を。え。く。崖。お。ひ。じ。地  
は。洞。間。に。劍。を。裁。つ。て。ぐ。れ。と。れ。と。れ。歯。を。あ。は。し。潮。を。蹴。て。く。さ。さ。さ  
よ。ある。折。り。も。あ。れ。高。間。夫。婦。が。形。體。煙。の。こ。と。く。ま。あ。ら。れ。俄。頃。は。二。つ  
の。燐。火。と。な。り。も。悪。魚。の。口。に。あ。は。る。と。え。え。怪。し。や。お。瞎。と。る。沙。魚。の  
猛。お。洞。間。を。嘴。で。洞。浪。を。潜。り。て。紀。平。次。を。被。さ。あ。げ。中。を。さ。背。上  
お。助。乗。し。て。走。る。る。お。船。り。も。速。う。り。けり。紀。平。次。と。この。形。勢。と。え。く。



且怪且泣ひくの高間磯菰おその身溺死ととりども忠魂  
 この大魚お馬り推君救ひし事よ。むりし唐土の韓退之の文を根  
 ても鰐を論し遠くこれを退せしと夢の屑つらに高間夫婦と  
 異國あもありがたうに忠臣の形と頻る感涙をさめゆるみ又今  
 さうに為朝の往方いうまじきひ中。安さ公とせうりら。さうに  
 その日も暮れ。風波中うやくに軟じう。沙魚のいう中う。お  
 通骨浪の上で走り。天へののくと明る比。父とおあうぬ嶋お酒さ  
 著浪打際お改よりて動く。紀平次とその意を以て。あてせ川磯  
 お登りつ大魚をえりのてりや。高間氏夫婦の忠魂むはし。誰  
 らも。大魚お附托し。必死とひ定めつ。推君と救ひまかす。せし誰  
 うその存おん盲亀の浮木お遇るより。まは稀るれ僕侍なり。是  
 全く推君の洪福おるのうら。老ふもされ紀平次を惜り。お  
 を存命可惜夫婦と二十あも。足らぬ齡を一蹴はして。千仞の底に沈  
 まけん。あうまうせねせなり。生死道を異おそれ。らう。別を  
 決するとも。さう易く推君と。さもかくもして。養育さん只ひとり  
 なたの。曹司の。お救なり。彼をおりひ。それをかり胸若し。さ。察し  
 らへ。その人お抱ひ。さう。啣。健男の。誠。え。や。海。大魚  
 も潮お吹た。さもに愁。あ。氣色。なり。が。返。巡。として。一。反。沖。の方  
 へ。還。さ。つ。二。の。燐。火。水。面。お。閃。光。出。大魚。さ。う。り。燐。火。消。て  
 迹。さ。く。り。あ。ち。り。さ。あ。と。れ。ま。も。紀。平。次。の。舜。天。丸。を。懐。お。林。定。と。抱  
 する。さ。じ。め。て。お。わ。ら。わ。て。汀。の。石。お。尻。を。う。け。孺。君。の。い。う。お。わ。ら。わ。ん。  
 生死の際も。あり。あ。う。て。さ。う。う。睡。り。あ。ふ。と。や。さ。ま。入。と。い。ひ。う。て。

つらととに覗けし痛しけり天丸と。しりの経ふ縁切らるる  
 ひとむらうらち驚きと。慌しく懐よりかた出て声を惜まひ泣れど。  
 磯馴松風岸らる浪の外より。後よりいづれなく。砂おはしる貝のうらみ  
 昨夜の雨の溜り水を。しりえ。斐る唇お。さし傾けても。今やせきも  
 咽喉の下のらで。さかかくふ。落るおの涙あり。あがくく。あて目  
 押拭ひ。かくある。と。事お。うら。大魚の奇特お。うらと。馬ひひ  
 なる。これひとり。存命て何えせん。高間夫婦もいと恨めし。らひの八千  
 遍百千遍。縦一年。三箇月。注ばとて。叫べ。か。と。後果多し。魂の緒を  
 繫ぶ。留べ。術のあ。うら。押ら。何國ぞや。人住山嶋と。か。え。ね。も  
 せめて亡骸を。瘞。もう。わ。せ。腹。う。死。切。て。三途の川も。死。出。の。山。路。も。紀。平。次  
 う。負。く。越。る。人。俟。身。人。ぞ。ん。ば。これ。は。じ。め。り。主。従。の。縁。結。り。れ。之。世  
 の宿因。違つて。人。導。れ。る。地。荒。尊。南。無。阿。弥。陀。佛。と。念。ふ。の。瞻。仰  
 親。ま。へ。鳴。山。の。高。峯。子。か。れ。た。雲。も。夢。の。迹。な。れ。た。と。ま。ひ  
 かつ。ね。この。話。は。朝。日。の。か。た。故。郷。と。ま。の。こ。ま。て。目。み。か。こ  
 ね。木。の。子。草。花。芳。しく。人。お。お。れ。ぬ。鳥。の。声。耳。置。し。に。瀧。津。瀬  
 の。外。お。訪。へ。と。家。も。な。し。浩。処。も。峯。吹。お。う。と。風。の。ま。あ。く。幽。々  
 ゆ。れ。讀。経。の。聲。も。紀。平。次。と。耳。次。側。り。あ。は。不。審。し。人。も。か。よ。わ。ぬ  
 あり。と。荒。磯。も。潮。垂。衣。お。は。り。行。ひ。と。ま。り。の。の。り。と。い。仙。人。の。崖  
 宅。なる。し。侍。人。巨。海。の。外。お。十。ラ。の。洲。あり。人。迹。の。希。後。と。る。と。こ。ろ  
 して。その。中。に。神。仙。あり。丹。を。煉。真。火。終。り。天。地。も。小。壽。し。と。て  
 所謂。徐。福。が。不。老。不。死。の。薬。と。求。り。と。い。説。も。誣。が。し。と。し。と。て  
 ぞ。六。観。音。大。士。の。お。い。と。補。陀。落。山。も。や。あ。ん。ど。う。ん。か。く。れ。仙

境小入りぬること幸ひん素ゆきて縁由を愁訴し冥奇回陽の某  
 も駿なり。推君の命救く再場あふとも因果の道理を聴せよ  
 多ひよるよそがさもりたぐく隨獄の苦患を脱して天堂よ生  
 かりんあつが治延てこの嶋不漂ひたれもそのうひありあつ  
 かりあつねり。とどろりごら。その健屍を抱とわけ。流經の声を  
 ぬて。舟より路なれ破山を幸じて松柏の巖小縁也。未兆死の洞  
 を獲りつ。攀登登夜の天風地小觸りて紫蘭の室再入のうら  
 彩雲天小遍りて春花の林は折つ也似より向上と不救千仞の阪墜  
 路滑直下せ六十万里の波濤天小流り。さうしく二三十町  
 登り来つらん。とあふ比白鹿木立の間より走り出紀平次の前  
 あらそ。郷導とぞねふ似り。とつ至る。紀平次の舟體猛り敷く  
 おんえり須臾の間山巖を登果とんれハ紗とりの老翁知照  
 戴せ鶴裳を被て巖の上小端坐せりとの形容頭の長くして自ら  
 眼秀眉髯白く童顔仙骨凡るべ。紀平次もその神仙なるや  
 去りて只顧つ也驚嘆し巖の下小躊躇して後を流るるをまわ  
 らじのりて老翁もあつ也経巻をすれかさしるすれ。紀平次も  
 志く對ひすことて再拜し神仙なり。とての小見を法し人活せる  
 と叫びり。老翁もこれをきき莞尔とうち笑ふ。汝ハ八町磯  
 紀平次大夫を抱とすれ候子ハ即ハ曹司の子舜天丸なりんや  
 近くあれといふ。その聰察堂も視るがとおろしれ。紀平次も  
 こゝてこの風波のなる小船を破られ。とつ漂泊あされ一五二十  
 ねの老翁らし白頭汝はよく常三つも苦中の苦と契して人の上

の人とならるにしとしり。昔樂時あり。死生命あり。今その児を相するふ。  
 曩も水お落く驚死としり。余教のまじりて。これを救ふて。あはれ。  
 易し。こへ。おせよ。といふ。紀平の天お改ひ地。喜む。忙しく。舞天丸  
 を。老翁の膝の上にお乗。か。老翁のやがて抱。と。りて。その口中。おの  
 か息を吹入。に奇なる。う。舞天丸の。勿心。鉄。として。蘇生。の。一。声。高。く。経  
 生。を。揺。揚。て。謙。を。ほ。ど。に。立。地。お。注。止。生。平。お。異。を。け。を。し。た。ま。ひ。  
 紀平。改。の。あ。ま。りの。喜。び。を。み。不。さ。え。涙。は。し。ぶ。も。て。老翁。を。救。回。伏。お。か。こ。  
 ぶ。じ。神。仙。の。庇。よ。ぶ。び。へ。枯。と。て。魚。の。水。お。躍。る。この。僥。倖。の。あ。る。を。か。  
 び。さ。も。老翁。の。い。ら。る。神。お。て。お。り。て。人。此。嶋。の。名。も。や。ま。し。あ。い。し。  
 多。く。し。とい。ふ。老翁。答。て。これ。ハ。名。も。好。く。氏。も。は。源。家。お。舊。好。の。氣。  
 り。て。緯。の。こ。も。及。ぶ。の。こ。の。地。方。ハ。姑。巴。汎。麻。と。名。づ。琉。球。國。中。山。の。

正西小岩田で四十八里 六十町一里をりつてこれを定む。傳信録云。唐山の里数をりて記せり。今琉球道と申す。 いし、より、いし、

ふしとへども海小珊瑚あり。山小仙挑あり。その果を食ふものハ飢を究ぐ

壽しこの嶋小白鹿あり。かの桃の葉を食ひ多なり。この姑巴汎麻山を

琉球の属嶋とれ。姑米山と相近し。大約琉球小二十六の属嶋あり。先東

の方小四の嶋あり。第一を久高と名く。琉球國中山の東十四里半

當り。六十町を一里にしてこれを 穀物小赤。採黄小。米あり。海藻小。海带菜。

の。魚。小。龍。蝦。五。色。魚。佳。蕪。魚。あり。本。黒。鰻。魚。と。名。く。大。が。れ。こ。の。ハ

長八九尺その肉を割く腊と名く。山小螺石多し。第二を津堅と名く。中山

の東三里半あり。第三を濱嶋と名く。南北二嶋。中山の東三里半小

の。第四を伊計嶋と名く。中山の東三里半あり。三の嶋の産物姑達

佳 所謂。小。も。さ。し。物。の。い。び。さ。ま。も。又。相。似。し。り。亦。正。西。の。か。こ。の。嶋。あり。

島琴持命  
住持魚  
かて  
聖徳の  
日黒  
まて  
目黒  
舞天丸  
琉球  
まて  
まて



名く中山の東北五十里あり。芭蕉檜木多し。第一を永良部と名く。或と訛る伊蘭埠と稱す。中山の東北五十五里あり。第二を徳嶋と名く。中山の東北六十里あり。第四を度姑嶋の東北西里あり。第五を鳥奇嶋と名く。中山の東北七十七里あり。第六を佳奇呂麻といふ。中山の東北七十七里あり。第七を大嶋と名く。度姑嶋の東北あり。中山を去る八拾里琉球より水行二日。舟して遠るべし。その嶋長サ十二里七ツの間切を分。西間切東間切笠利名瀬屋喜住用古見ホの間切是なり。彼嶋人より小琉球と稱す。二百餘の村あり。米粟豆薯。木綿芭蕉羅漢松桑竹牛馬羊大猪雞山猪兎鴛鴦野鴨鷺鳩雀鴉あり。又海瓜と稱すもの。これ鯉の類なり。又紅椗黒椗檀と稱す油樹あり。

その子を油小搾る。この外菓小諸子あり。又焼酒黒糖蘇鉄ホ。これあり。その山あり。その山あり。清水山菊花山永明山と名く。又その山の北一里許。大なる石あり。形圓柱の如く。してその高サ百尺。こと成赤瀬の碑と稱す。むし國王の鼻祖天孫氏の建るところなり。石の面ハ文字を勒せし。只美婦人の形を刻り。その容止活潑かごとく。いと感入るべし。石を紫色に染め置あり。この鼻をこえて人居りし。按ずる大嶋。本小琉球と名。為朝琉球。大嶋の鼻の南に。第一を鬼界と名づく。中山を去る九拾里。琉球東北最遠の島なり。この嶋人食ふ小箸は。しるをのり。この島の産。檜木至極の良材なり。駿の年を獲れども朽蝨と。その光澤もく鏡の如く。この外ハ土噶喇の七嶋あり。琉球の属嶋は。中ハ又南ハ

華蓋山  
ミのり  
あてはか  
り山球  
てこれ

黒木又鳥  
木との書  
その木  
又紅木  
のり  
標百ハ  
のり  
奇石  
五洲小  
石とめる  
同物

七ツの島あり。第一を太平山と名く。じり宮古と稱ふ後迷古と呼ぶ。その後修小訛りて麻姑山といふ是なり。此島中山の南二百里あり。その中子荒山と呼ぶ山甚高し。山の上子瑠石亭あり。山の周囲二百里あり。五穀牛馬多し。麻布麻草薦を産ま。又紅酒を醸す。これを太平酒と名く。第二は奇麻と名く。太平山の東南あり。第三を伊良保と名く。太平山の西南あり。第四を姑李麻と名く。太平山の西あり。第五を遠喇麻と名く。太平山北正西あり。第六を西那と名く。太平山の西南あり。第七を鳥噶弥と名く。太平山の西北あり。以上の七嶋を國人へなて太平山と稱ふ。亦西南九ツの嶋あり。第一を八重山と名く。一名北木山。太平山の西南四里あり。中山を去ること二百四拾里。檜木黒木赤木あり。草薦牛馬螺石麻布梯衣海參以産ま。紅酒を醸して密林酒と名く。五穀のりなり。瑛璩瑤珊瑚羊肚海松海芝海栢松紋赤奇石あり。第二を鳥巴麻と名く。八重山の西南あり。第三を波渡川と名く。八重山の西南あり。第四を由那姑呢と名く。八重山の西南あり。第五を姑弥と名く。八重山の西あり。鳥巴麻以下の七嶋は較て此島少許大なり。第六を武富と名く。八重山の西。姑弥の東あり。第七は父里嶋と名く。八重山の西の方。北に當り。第八を新城と名く。八重山の西あり。第九を波照間と名く。八重山極西北あり。以上八の島を國人は八重山と稱ふ。總三十六嶋。琉球の属嶋なり。住人自在なるはこれ。これを審ふるとるの稀なり。汝記憶して忘とせ。後かゝるそ用。此ころありん。この兒とや父母別と。かゝる孤島に漂泊とといふべし。









常言お鶴の仙人の驥なりとぞいふる年八百廿して天奇とあはじ  
 千載はして神變彊はしつゞく縁故を考れお彼老翁を八幡殿の  
 放りしれ鶴也しては曹司の為よ再生の恩を報せりゆの亦彼  
 指し乗く九霄お托行とれといふ福祿壽星なりけり楚とへんひ  
 定めごとけれと皆目厳君の陰徳しりしかるごとしてこゝ小陽報の  
 小こそ今何をを敷れ侍らん終る父上母上おあじ進ふとて  
 りの次といひ慰むるよ舜天丸の年やありもおとまきよく其意を  
 ほうりけん父とも母とも莫少ひものごと慰らるゝ稚子より慰くは袖  
 の雨木も名の雲よ紛らしつ。紀平次へ彼挑の枝を剪とるく。矢お  
 造る舟件の多れ羽を短鹿の角と拾ひく鐵とし黄金の牌と幣  
 として三社の神お祝祀て挑の古木の虚とありとれ内よ立並べそ

祈念を熾し。又舜天丸小武藝を教るを月の務とし或は舟お神  
 曲くろとじ或は野駒よ木の皮を糸綱として騎射遠射を習はし又  
 ありとれハ砂跡つけて文字と字とれ小聰明唐悟儔なり。年  
 十支小及へる比あはよろつ所の紀平次お立せり。彼兵書を諳  
 ぶく。發明とれとる多うり。されむ主従只二人姑巴嶋小五七  
 年の月日代わらう。鹿の皮を衣とし鳥の羽を衣とし夜ハ崖宅  
 の内よ卧し昼ハ磯方小千も攻友とし朝みく海より出る日新天  
 えても故宮のなりけりけり。舜天丸と。之筋の征矢を伏おが。今  
 下とび父母お。

旅りつ。主と家隸とらうらとじ。家隸ハ  
 苦さるらうけ。おひ者小衣と。

